

# 政治学概論 I

## (4) 立憲政治

# 近代立憲主義と立憲国家の成立

- イギリスの「マグナ・カルタ」「権利章典」  
フランス革命、アメリカ独立建国と憲法（Constitution）制定

中央集権国家・絶対主義王政から立憲国家への移行  
「王といえども法律に従う」王権のコントロール  
国の根幹・土台となる法律＝「法律の法律」憲法典

為政者にとって政治の指針  
＝人民・国民の権利と自由を保護（人権思想の発達）

# 「三権分立」の形成

モンテスキューの権力分立論「立法・執行（行政）・司法」  
「法の支配」の制度化

絶対君主（王がすべての権力）⇒議会在立法権の一部を持つ  
⇒内閣・首相（議会和君主の調整役）の発達⇒議院内閣制

民主主義の進展で議会の権力が増大、国王は内閣の指名権を失う  
「君臨すれども統治せず」⇒議会在首相を決める  
司法権の独立⇒法の恣意的な執行・運用を防止する

# 近代立憲主義のモデル

- ・立憲君主政

君主（王）が憲法制定  
⇒ 自己の権力を制限  
議会に立法権（の一部）  
裁判所司法＝独立  
行政権は君主が保持

- ・国民主権型

国民が憲法制定  
立法、司法、行政権は国民に  
行政権の行使も法律で定める

# 違憲立法審査と憲法改正

国民主権への移行⇒国家の行政機能増大⇒行政権の優位  
議院内閣制⇒法の制定と法の執行の区別があいまいに  
「法の支配」強化のための違憲立法審査  
（「統治行為論」による消極性）

憲法改正に限界はあるか（限界説・無限界説）  
「硬性憲法」（憲法改正手続きが厳格）